

公開シンポジウム報告書

「才能が芽吹く大学入試へ：日本の科学技術と大学教育のこれから」

日時：令和7年9月8日（月）13:30-17:00

会場：名城大学 名城ホール（対面およびオンライン併用）

主催：日本学術会議 総合工学委員会「未来社会と応用物理分科会」、応用物理学会

テーマ：「才能が芽吹く大学入試へ：日本の科学技術と大学教育のこれから」

世話人：玉田 薫（日本学術会議 総合工学委員会委員長／九州大学副学長）

関谷 毅（日本学術会議 総合工学委員会「未来社会と応用物理分科会」委員長／
大阪大学教授、シンポジウムモデレーター）

吉田郵司（日本学術会議連携会員／国立研究開発法人産業技術総合研究所 領域
長補佐、筑波大学 数理物質科学研究科 教授（連携）／シンポジウム世
話人）

田和 圭子（日本学術会議 総合工学委員会「未来社会と応用物理分科会」副委員
長、関西学院大学教授／シンポジウム世話人）

シンポジウム概要

本シンポジウムは、大学入試制度と科学技術人材育成の在り方を多角的に検討し、日本の未来を支える教育・研究基盤を議論することを目的として開催された。講演者を含む参加者は、現職・元職の学長、副学長、政策担当者、企業・学会関係者、市民で参加人数は135名（対面会場63名、オンライン72名）であった。また本シンポジウムは中日新聞による取材も行われ、翌日9月9日の中日新聞に掲載された。

開会挨拶は木本 恒暢氏（応用物理学会会長／京都大学教授）で、続いて趣旨説明が世話人の玉田 薫氏によってなされた。第一部 招待講演「大学入試制度と次世代イノベーション人材」では、世話人の関谷 毅氏が司会進行を行い、以下の講演者による講演が行われた。奥篤史氏（文部科学省 科学技術・学術政策局人材政策課長）「今後の科学技術人材政策の方向性」、波多野 睦子氏（東京科学大学 理事・副学長／内閣府 CSTI 有識者議員）「VUCA 時代の応用物理学会と人材育成」、杉山 直氏（名古屋大学 総長）「次世代イノベーション人材育成に向けた名古屋大学の取組」、大野 英男氏（前東北大学総長）「多様な才能が開花する入試と教育に向けて」、益 一哉氏（元東京工業大学学長／産業技術総合研究所センター長）「多様性が産む研究と教育の進化：東工大の挑戦と展望」。第二部は総合討論「パネルディスカッション」で、世話人の関谷 毅氏がモデレーターとなって進めた。パネリストは上記講演者に木本会長と玉田薫氏が加わった。パネルディスカッションの100分間で、会場とオンライン両方の参加者から質問が途切れることなく続けられ、活発な議論が行われた。閉会挨拶は安達 千波矢氏（応用物理学会副会長／九州大学教授）によって行われた。

講演とパネルディスカッションの論点

本シンポジウムでは、入試制度がこれまで「公平性」「画一性」を重視してきたが、社会が求めるのは創造性・協働性・多様性を持つ人材であり、それと解離していること、また、高校段階での理系／文系の早期分断が、社会に必要とされる融合的知識の涵養を妨げている可能性があることで、大学入試を含めて検討する時期に来ていること、さらに、博士人材の育成と処遇改善が喫緊の課題であり、政策的な人的資本投資が不可欠であるという点に基づいて行われた。

招待講演の要点は、奥氏が博士人材支援、産学官連携による新たな資金枠組み、初等中等教育からの体系的育成を強調した。波多野氏はAI時代の教育・入試・研究評価の変革を提言し、Well-being と創造性の関係性に注目した。杉山氏は女子枠導入、アントレ教育の必修化など、名古屋大学での改革事例を紹介した。大野氏はAO・総合型選抜拡充の実践と成果、学部・大学院教育の国際化、社会との接続の必要性を強調した。益氏は女子枠導入の経験から「行き過ぎた公平性」を問い直し、多様な人材を受け入れる大学改革の重要性を提示した。

パネルディスカッションの主な論点は、**一般選抜と総合型選抜の共存**（公平性の担保と多様性確保の両立は可能か？）、**高校教員との連携**（入試改革を現場に浸透させるための対話の重要性）、**博士進学率の低迷**（経済的支援不足、企業の給与水準、就活の早期化が大きな障壁）、**女子学生と理工系**（物理離れや文化的バイアスを克服するための入試・教育改革、補習制度）、**社会的合意形成**（多様な価値観が存在する社会の中で「ありたい未来像」を描き、その実現のための教育制度を構想する必要性）であった。

後記（日本学術会議 総合工学委員会「未来社会と応用物理分科会」委員長 関谷 毅氏）

学長経験者や政策担当者の先生方がそれぞれの立場から示された実践と課題、そして会場やオンラインでご参加いただいた多様な皆様の声が交わることで、想像以上に豊かな対話が生まれたことに深く感謝する。

生成AIが社会に急速に浸透する今、知識や情報の処理は誰もが容易に行えるようになった。その一方で、人間にしか果たせない創造性や協働性をどう育むかが、かつてないほど重要になっており、入試制度や教育制度は、この問いにどう応えていくかを映し出す鏡であり、今回の議論はその方向性を社会全体で共有する大切な機会となった。また、応用物理学会という産業界や社会と近い場で開催できたことは大きな意味を持つ。入試改革や人材育成は学术界だけの課題ではなく、企業や社会の将来と直結する問題である。本シンポジウムが、その橋渡しの一助となったのであれば、主催者の一人としてこれほど嬉しいことはない。今後も、ここで得られた知見と対話を次につなげ、日本が未来に向けて必要とする人材を育てるための制度や環境づくりに貢献していきたい。ご登壇いただいた先生方、関係者の皆様、そして熱心にご参加くださったすべての皆様に、心より御礼申し上げます。